氏　　名	SARI JAMMO
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博　甲　第　　８８９８　　号
学位授与年月日	平成　３１年　３月　２５日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	Beyond Death: The Tale of a Neolithic Society and the Study of an Outdoor Communal Cemetery at Tell el-Kerkh, Northwest Syria （死と弔い - 北西シリアのテル・エル・ケルク遺跡における新石器時代社会と屋外型共同墓地の研究）

主　　査	筑波大学	教　授	博士（文学）	常　木　　晃
副　　査	筑波大学	教　授	PhD	山　田　重　郎
副　　査	筑波大学	教　授	PhD	三　宅　　裕
副　　査	筑波大学	准教授	博士（文学）	谷　口　陽　子

論　文　の　要　旨

本論文 Beyond Death: The Tale of a Neolithic Society and the Study of an Outdoor Communal Cemetery at Tell el-Kerkh, Northwest Syria は、地上で最も早く新石器化が起こり、社会が拡大、複雑化する旧石器時代終末から新石器時代にかけての西アジアの社会において、死者をめぐる儀礼と埋葬、墓の営まれる空間的位置などに着目し、それらの変遷が当時の社会においていかなる意義を有していたのか、その背景をもたらしたのは何かについて、主として北西シリアに所在するテル・エル・ケルク遺跡の屋外型共同墓地の研究を通して解明しようと試みている。本論文は、Introduction と Conclusion を含む全 6 章から構成されている。

Chapter 1: Introduction では、まず本論文の目的と研究の背景について述べられる。先史時代の西アジアの社会では、死者は様々なコンテクストで埋葬されている。例えば埋葬場所についてみると、旧石器時代終末期の洞窟内やそのテラス、あるいはオープン・エア・サイト内の埋葬から、先土器新石器時代の村落内住居の床下や中庭への埋葬、そして土器新石器時代の村落内墓地の出現、その後の独立墓地の成立など、大きな変化が認められる。このような埋葬場所の変遷や埋葬法の変化は、それぞれの社会の死者への認識や他界観を反映しており、それは生者の社会そのものの変化をも反映していることが論じられる。

Chapter 2: Burials in Archaeological Contexts in the Natufian and the Pre-Pottery Neolithic Period では、先史時代西アジアのナトゥーフ期から先土器新石器時代 B 期までの死者の埋葬の変遷について、特に埋葬場所が明確にわかる遺跡を取り上げて、分析を加えている。ナトゥーフ期、先土器新石器時代 A 期、同 B 期の西アジアには多様な埋葬が認められる。墓が発見されるのは、生活場所の覆土中や、住居の床上や床下、

住居の間、中庭であり、また地域や時代によっては、埋葬専用あるいは宗教的な色彩の強い建物内から多数の人骨が発見される例もある。埋葬位置を視点にこれらの埋葬例を見渡すと、ナトゥーフ期の特異な少数例を除くと、ほとんどのケースで、生者が生活している場所に近接した場所が選択されていることが分かる。

Chapter 3: Tell el-Kerkh and its Pottery Neolithic Cemetery では、本論文の主たる研究資料である、北西シリア所在のテル・エル・ケルク遺跡のうち、遺跡北側のテル・アイン・エル・ケルク中央区から発見された土器新石器時代の屋外型共同墓地について、詳細な整理と分析が加えられる。テル・エル・ケルク遺跡では、筑波大学とシリア文化財博物館総局により、1997 年から 2010 年にかけて共同で発掘調査が行われた。土器新石器時代の墓地は、2007 年に発見され 2010 年まで調査が続けられ、240 体以上の人骨が出土している。土器編年と人骨そのものの ^{14}C 年代測定結果から、紀元前 6400－6200 年の間に営まれた、世界でも最古級の屋外型共同墓地であることが判明している。ケルク墓地の埋葬を、１）一次葬、2）二次葬、3）火葬、4）土器棺葬に区分し、また、その出土層位から、Layer 6 → Layer 5 → Layer 4 と連続する 3 つの時期に区分している。本論文では、それぞれの埋葬を 1 体 1 体詳細に整理し、埋葬区分や、墓の位置関係、副葬品などに考慮しながらその変遷を詳細に跡づけている。

Chapter 4: Burials in the Pottery Neolithic Period では、テル・エル・ケルク遺跡の土器新石器時代墓地と、ほぼ同時代に営まれたシリアやアナトリアにある土器新石器時代の埋葬の特徴を比較研究している。著者によれば、土器新石器時代の集落そのものについては、先土器新石器時代の様々な様相を色濃く残す集落と、土器新石器時代として新たな変革が様々に認められる集落があるとされる。特に埋葬について比較研究に取り上げられたのは、テル・サビ・アビヤド、ハケミウセ、キョシュク・フユックなどの遺跡であるが、集落の様相と同様に、先土器新石器時代からの埋葬法を色濃く残す遺跡と、新たな葬法が現れる遺跡があるとされる。地域性が特に顕在化するのが土器新石器時代の特質であることが強調されており、死者の取り扱いの面にも、そのような地域性が顕在化していくとされる。

Chapter 5: Discussion-Reasons for the Emergence of Tell el-Kerkh Cemetery では、土器新石器時代にテル・エル・ケルク遺跡で屋外型の共同墓地が初めて登場した理由について、考察がなされる。まず、同遺跡の所在する北西シリアのルージュ盆地の特別に恵まれた自然環境が強調される。中央にかつて湖が存在したような豊富な水資源と、有機栄養分の豊富な黒色土よって、今日でも他地域に比べてルージュ盆地は農耕地として特別恵まれた環境にある。テル・エル・ケルク遺跡の発掘調査は、農耕を始めた新石器時代においても同遺跡が非常に豊かな場所にあり、西アジア新石器時代でも最大級の集落が先土器新石器時代から土器新石器時代にかけて営まれていたことを明らかにした。ケルクの先土器新石器時代末から土器新石器時代にかけて、長期にわたって定住農耕集落が営まれ続け、大型の複雑な社会が存在した。その社会では、共同貯蔵や、共同調理場などが存在し、経済的にも個人所有権の存在や共同所有の在り方などを示す遺物が出土している。こうした社会情勢の中で、それまで個々の住居と密接な関係を保っていた埋葬が、共同墓地に収れんされていった可能性が高い。しかし一見共同墓地のように見えるケルク土器新石器時代墓地ではあるが、そこから出土する人骨のアイソトープ分析では、共同墓地の中に親族ごとに区分できる集落内グループの存在が想定され、また考古学的にも、共同墓地の中に石列で区画を設けたり、廃屋を利用した墓があるなど、家族墓から共同墓への過渡的な様相をも示している。いくつかの親族が共同化しつつも、墓地の中でそれぞれの場を占有していたのが、ケルク土器新石器時代墓地の実態であったと想定される。

Chapter 6: Conclusion では、これまでの分析と議論を踏まえて、旧石器時代終末から土器新石器時代までの埋葬の変遷の背景について、まとめている。先土器新石器時代までの、住居と密接に関連した埋葬は、祖先崇拝と密接にかかわっていたが、土器新石器時代にはそれが薄れ、テル・エル・ケルクやテル・サビ・アビヤドのような共同墓地が出現している。そこには、土器新石器時代の住居や居住域が祖先崇拝などの儀礼の場と

いうよりももっと経済的な場となっていたことが反映していると考えられる。テル・エル・ケルク遺跡での土器新石器時代の屋外型共同墓地の成立は、大きな社会的変革と密接に結びついており、埋葬と葬送の変化や革新は社会の複雑化が非常に進んだ時のそれぞれの社会のアイデンティティの表現とみるべきこと、などが主張される。土器新石器時代の死者と墓の空間的関係は、その時代の人間の集団的アイデンティティをまさに表しているのである。

審　査　の　要　旨

1　批評

本論文は、世界に先駆けて農耕が開始され、社会が複雑化していった新石器時代の西アジア社会において、死者がどのように扱われ、死者をめぐる葬送行為が当時の社会においていかなる意義を有していたのか、その意義がどのように変化していったのかを、特に北西シリアに所在するテル・エル・ケルク遺跡の屋外型共同墓地の研究を通して読み解こうと試みた労作である。本論文の基盤となっているのは、筑波大学がシリア文化財博物館総局と共同で発掘調査を行っていた北西シリアのテル・エル・ケルク遺跡で発見された土器新石器時代墓地の資料分析であり、著者はアレッポ大学に在籍当時、この遺跡の発掘調査に参加し、自ら墓地の調査を実施していた。240 体以上の人骨が出土したこの複雑な墓地の資料を自ら一つずつ整理して資料化し、それを西アジアの埋葬史の中に位置づける作業には、膨大な労力と忍耐を要している。ケルクの屋外型共同墓地は、現代の一般的な墓地の在り方にまでつながる埋葬法であり、その最も古い例の一つとして、歴史的にも重要な意味を有する。なぜこのような墓地が出現したのかについて、著者は、同遺跡が位置するエル・ルージュ盆地の農耕地としての豊かさと長期にわたる新石器化の展開に着目し、西アジアの他地域に比べていち早く社会の複雑化を進展させたことがその背景にあると考えている。特にこのような屋外型共同墓地の成立は、社会的な変革と密接に結びついており、埋葬と葬送の変化・革新は社会の複雑化が非常に進んだ時のそれぞれの社会のアイデンティティの表現とみるべきことなど、示唆に富んだ提言が随所に見られる。

本論文の課題としては、ケルク墓地の分析の中で、それぞれの集落内親族グループの区分を主として埋葬の位置関係のみに頼って行っていることがある。この点については、グループごとの人骨の構成や、副葬品の種類、在り方などにさらに詳細に分析を加えることで、親族グループの区分やその存在の蓋然性をより高めることができたのではないか、と思われる。

しかしながら、屋外型共同墓地の出現を西アジアの埋葬史の中に位置づけ、さらにその社会的背景を分析した本研究の成果は、全体として西アジアの埋葬史の研究に大きく貢献するものであることは間違いない。莫大な労力が投入され、十分にオリジナル性を備えた優れた論文として、著者の労をねぎらいつつ、その成果を高く評価したい。

2　最終試験

平成 31 年 1 月 11 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。